

千葉県八千代市

川崎山遺跡

- y地点発掘調査報告書 -

2023年2月

株式会社 中央住宅
有限会社 原史文化研究所

千葉県八千代市

かわさきやまいせき
川崎山遺跡

- y地点発掘調査報告書 -

2023年2月

株式会社 中央住宅
有限会社 原史文化研究所

例 言

1. 本書は、千葉県八千代市萱田町745番6に所在する川崎山遺跡y地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は八千代市教育委員会（以下、市教委）の指導の下、事業者の費用負担を受け（有）原史文化研究所（調査担当 田川 良）が実施した。
3. 発掘期間は2022（令和4）年7月12日～2022（令和4）年7月22日、調査対象面積は31㎡である。
4. 本報告に係る文資は、第Ⅰ章宮澤 久史（市教委）、第Ⅱ～Ⅴ章田川で、編集は田川が行った。
5. 本書に使用した1/50,000地図は、国土地理院発行（「佐倉」）を使用し、第2図の1/2,500は八千代市都市計画図を加工使用した。
6. 発掘調査における記録類は市教委で保管している。

目 次

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 調査経過	4
IV. 検出した遺構	5
1. SK01	5
2. SD01	5
V. まとめ	10
第1表 各地点の陥穴	10

挿 図 目 次

第1図 川崎山遺跡と周辺の遺跡	2
第2図 調査区の位置と陥穴検出の各地点	3
第3図 調査区全体図（網部分本調査区）	5
第4図 SK01・SD01実測図	7

図 版 目 次

a 遺跡近景（北より見る）	3	b 遺跡近景（東より見る）	4
c 発掘区土層断面	6	d SK01（東より見る）	8
e SK01（南より見る）	8	f SK01土層断面	8
g SD01	9	h SD01土層断面（1）	9
i SD01土層断面（2）	9	j 調査完了時（東より見る）	9
k 調査完了時（南より見る）	9		

I. 調査に至る経緯

令和4年2月14日、株式会社中央住宅代表取締役 品川典久氏（以下、事業者）から「埋蔵文化財の取扱いについて（確認）」の文書が八千代市教育委員会（以下、市教委）に提出された。市教委は現地踏査を行い、開発面積564.43㎡の全域が周知の埋蔵文化財包蔵地（川崎山遺跡）に含まれると判断し、令和4年2月15日その旨を事業者に回答した。回答後、事業者と協議を行い、遺跡の範囲、性格等を明らかにするための確認調査を実施するに至った。2月28日、事業者から文化財保護法93条の届出が提出され、市教委は準備が整った令和4年4月15日に確認調査を開始した。調査は4月22日まで行い、縄文時代の陥穴を検出し、協議範囲は31㎡となった。この結果を受け、市教委と事業者で協議が行われ、記録保存（発掘調査）の措置をとることとなった。調査の実施については、民間調査機関による実施が合意され、市教委は民間調査機関各社から調査計画書・積算書の提出を求めた。事業者との協議を重ね、適正な調査実施が可能と判断した調査機関の中から有限会社原史文化研究所が選定された。令和4年6月10日、事業者、有限会社原史文化研究所、市教委との間で発掘調査の実施に関する協定書を締結し、同日、有限会社原史文化研究所から市教委に文化財保護法92条の届出が提出され、本調査実施に至った。

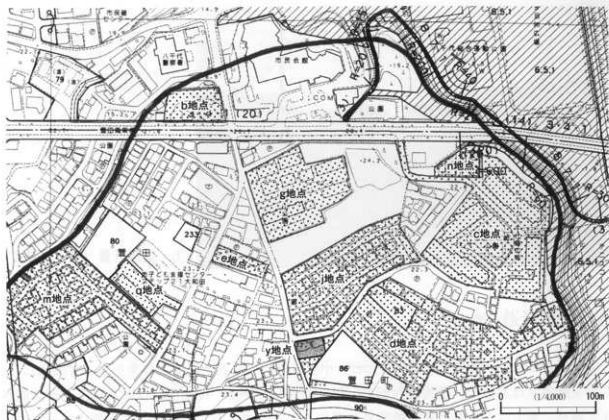
II. 遺跡の位置と環境（第1、2図、図版a、b）

川崎山遺跡は千葉県八千代市萱田町に所在する旧石器～中・近世の包蔵地・集落跡で、今回の調査箇所であるy地点は同町745番6に位置している。遺跡は印旛沼に流入する新川の西岸域、北側に池ノ谷津、南側は上ノ山谷津が彎入する方形の標高おおそ23mの台地上に占有する。y地点はなかでも上ノ山谷津の緩やかな北側斜面部に向かう谷頭に近い箇所に位置し、場所としては過去の調査地点であるj地点の南側、d地点西側の上ノ山谷津谷頭付近にあたる。新川沖積地面との比高差は15～16mほどである。川崎山遺跡は、その先鞭である第1次調査(a地点)が1979年に実施された。これ迄40年以上、25回にも亘る調査が重ねられている遺跡である。現在の萱田地区は住宅地としての整備が充実して、往時の環境の把握が難しいような現況である。これ迄の調査実績から、遺跡は旧石器～奈良・平安、中・近世の各時代が知られ、縄文時代の遺構として特に陥穴の存在は注目される。その展開は台地東縁辺部～中央部にかけて分布し、これまでに9地点42基の存在が報告される。また、池ノ谷津の谷頭付近に中期中葉の住居、前期後葉～中期前葉の土坑の存在も見られるが、検出状況から長期に亘る占有状況とは言えない。弥生後期以降の集落跡は台地東側斜面に向かって展開する傾向が見て取れ、本地域特有の占有状況を示している。周辺の各台地上には多くの遺跡の展開が見られ、支谷対岸や谷頭付近に白幡前（旧石器・弥生～奈良・平安）、池ノ台（縄文、平安）、北裏畑（縄文・近世）、上ノ山（弥生）遺跡が、新川を挟んだ対岸には浅間内（縄文～中・近世）、殿内（弥生～奈良・平安）、持田（古墳）などの遺跡が知られる。特に縄文前～中期には定住化の傾向が見られ、古代では下総国印旛郡村神郷に比定される地域に含まれるとされ、特徴的な遺跡の在り様を示している。



- | | | |
|----------|-------------|-------------|
| 1. 川崎山遺跡 | 10. 長兵衛野南遺跡 | 19. 村上第2塚群 |
| 2. 上ノ山遺跡 | 11. ワサル山南遺跡 | 20. 村上第1塚群 |
| 3. 北裏畑遺跡 | 12. ワサル山遺跡 | 21. 村上込ノ内遺跡 |
| 4. 池ノ台遺跡 | 13. 権現後遺跡 | 22. 沖塚古墳 |
| 5. 白幡前遺跡 | 14. 持田遺跡 | 23. 沖塚遺跡 |
| 6. 井戸向遺跡 | 15. 正覚院館跡 | 24. 黒沢池上遺跡 |
| 7. 北海道遺跡 | 16. 殿内遺跡 | 25. 黒沢台古墳 |
| 8. 坊山遺跡 | 17. 浅間内遺跡 | 26. 新林遺跡 |
| 9. 向山遺跡 | 18. 根ノ上神社古墳 | 27. 二重堀遺跡 |

第1図 川崎山遺跡と周辺の遺跡



第2図 調査区の位置と陥穴検出の各地点



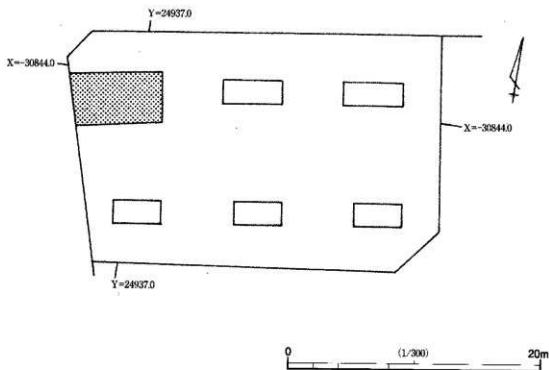
a. 遺跡近景 (北より見る)



b. 遺跡近景（東より見る）

Ⅲ. 調査経過（第3回）

発掘調査は2022（令和4）年7月12日、小型重機による表土層除去作業をもって開始した。本調査対象区は31㎡で、敷地北西部の一隅に位置している。現地現況は除草シートが設置されており、表土除去作業は比較的容易に進めることができた。表土層除去作業に伴っての土層観察の結果表土層の上に盛土が重ねられていた。盛土及び表土層は、深いところで凡そ80cmの堆積で、盛土にはコンクリートガラなどが含まれる。表土層は比較的しまり、粘性のある土層であった。盛土、表土層以下ローム層に至る中間層である2、3層（黒褐色土層、ローム漸移層）は、2層（10～15cm程）、3層（10～20cm程）の堆積が見られ、いずれも遺物を包含することはなく無遺物層である。本遺跡の別地点では新規テフラ層の堆積が見られる場所もあるとの指摘であるが、本地点では新規テフラ層の確認はできなかった。またこれまでの調査の多くの地点で、表土→ソフトローム層との記述が見られる堆積にあって、基本土層把握の一資料の状態を確認できたのは、本地点における成果のひとつと言える。3層以下には約35～50cmのソフトローム層（Ⅲ層相当）、ハードローム層（Ⅳ層相当）の堆積が認められた。調査区が狭小で遺構の展開状態等の制約下、深掘区設定が難しいこともあって基本土層の把握はこの高さまでとし、Ⅴ層以下の確認は実施しなかった。また、本遺跡では旧石器の存在が知られているが、今回のy地点ではローム層中に遺物は見られなかった。本遺跡他地点の深掘区の状態を見ると、土層は本地域一帯の状態と変化は認められないことから、本地点の堆積も大差はないと思われる。遺構確認面としたローム層上面において、市教委による確認調査のトレンチ跡を確認するとともに、遺構確認面上に土坑（陥穴：SK01）の全容を把握した。また調査区西側部分に南北方向に走る溝の存在を認めた（SD01）。SK01の南側部分とSD01東壁部が重複した状態を確認した後、それぞれの遺構について調査を実施した。溝は西壁部分で長方形土坑（芋穴?）と重複しており、土坑の方がSD01を切った状態である。今回の作業中、天候不順の影響が大きく作業効率の悪い状態が続いたが、SK01、SD01の調査を進め、同月20日までに完掘、記録作業を共に終了した。同月22日、市教育委員会による終了確認を経て、原状復帰を行い、現地調査を完了した。



第3図 調査区全体図（網部分本調査区）

IV. 検出した遺構（第4図、図版c～k）

1. SK01

発掘区ほぼ中央部に検出した。後述するSD01とは長軸南側頂部付近で重複し、一部を溝に切られた状態であるが、遺構の把握には問題のない状態である。平面形は長楕円形で、長軸2.62m、短軸0.9mの規模を持つ。遺構の主軸方向をN-27°-Eに有しており、いわゆるTビットの形態を持つものと判断できる。平面形は長楕円形で、掘り込みは底面に向かって漏斗状に極端に細くなっている、底面の最も幅の狭い部分でおよそ12cmである。遺構確認面からの掘り込みの深さは、深い部分で127.5cm、浅い部分で122cm程と底面はほぼ平坦であった。掘り込みの状態は、中位部まではなだらかな傾斜を有し、中位部以下では急激に直立気味に深さを増し、幅が極端に細くなる形状を呈す。土坑の壁はオーバーハングすることなく底面に至る。幅のない溝状の底面部に小ビットなどの掘り込みは認められなかった。土坑覆土は4層に分層出来た。1、2層は自然埋没土と考えられ、3、4層はロームを主体とした人為的な埋没土であろうと考えられる。覆土中からの遺物の出土はない。土坑の形態、覆土の状態、周辺遺構の時期等から縄文期の陥穴と考えられるが、時期特定は出来なかった。本遺跡に展開する陥穴の分布域の南側斜面部に近い位置に含まれる陥穴と見え、確認調査等の結果とも総合すればその分布域では疎に当たる場所であったと言える。

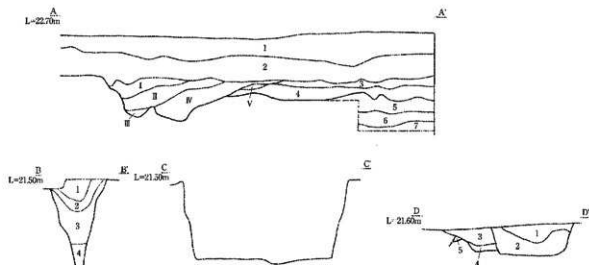
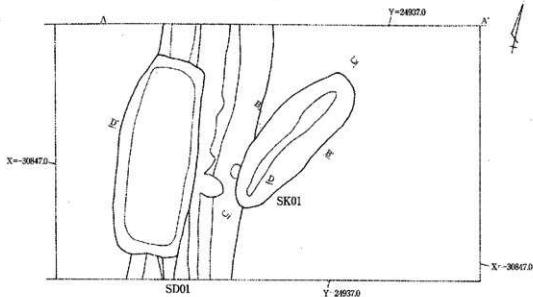
2. SD01

発掘区西側部分、道路敷部に近い箇所に検出した。遺構検出部の西側部分に長形状の土坑（芋穴？：長軸3.12m、短軸1.25m、遺構確認面からの深さ54.5cm）が溝西壁の一部を切っ

た状態で重複する。芋穴の壁はほぼ直立し、底面はほぼ平坦であった。掘り込みはしっかりとしているものの覆土は柔らかく、時期的には新しいと考えられる土坑で、遺物は何ら出土しなかった。溝は、幅1.75m、遺構確認面からの掘り込みは深い場所でおおよそ65cmを計測し、ほぼ南北方向に走った状態である。溝の形状は西側部分に1段の浅いテラスを有し、結果2段構造を有している。中央部に鍋底状の底面を有する深い部分が認められる。覆土の状態などから2条が並行した溝ではなく、結果的にこのような構造になったものと考えられる。溝南側部分でSK01を切った状態と溝肩部に小ビット状の掘り込みが認められたが、連続することはなく溝に付属したのか確認に欠ける。本溝は本地点北側のj地点における第1号溝に連続し、南側につながる溝と考えられる。j地点の見解では、この溝は地境溝であろうとされる。このような構造を有する溝は、他の地点において幾条も検出されており、時期的には多岐に亘り、性格の異なるものであろうが、いずれも時期の特定には至っていない。ただj地点の溝覆土に関して少なくとも2度の掘り返しが考えられるとの見解が示されている。今回検出した溝は、形態、用途など不明の点が多くあるため、断定することは難しいが、これまでの調査成果などから時期的な帰属は、近世以降の可能性が高いと考えられる。



c 発掘区土層断面



岡崎山遺跡・竪土層説明

1. 溝
2. 10YK3-3 (灰褐色、ローム状少量含む、しまりややあり、粘性なし、硬質、粘り強い、土)
3. 10YK3-2 (黒褐色、ローム状少量含む、粘性強い、しまりややあり、粘りなし)
4. 10YK3-3 (同上) (黒褐色、しまり、粘りやや強い、ローム多量含む)
5. 10YK5-6 (灰褐色、しまりやや強い、粘性ややあり、ソフトローム層)
6. 10YK6-6 (暗黒褐色、わずかにロームブロック含む、しまり強い、ソフトローム層)
7. 10YK6-6 (暗黒褐色、しまり強い、ハードローム層)

SK01土層説明

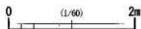
- I. 10YK3-4 (灰褐色、やや多くのローム状、10cm先のロームブロック含む、しまりやや強い、粘性強い)
- II. 10YK2-3 (黒褐色、少量のローム状含む、しまり強い、粘性なし)
- III. 10YK3-3 (暗褐色、多数のローム状、ロームブロック含む、しまり、粘性やや弱い)
- IV. 10YK2-2 (灰褐色、少量のローム状含む、しまりやや強い、粘性強い)
- V. 10YK2-2 (暗褐色、1-2cm先のロームブロック多量に含む)

SK01土層説明

1. 10YK3-1 (黒褐色、多くの腐植土、少量のソフトロームブロック含む、しまり、粘性なし)
2. 10YK3-4 (暗褐色、少量のローム状、わずかな15cm以下のロームブロック含む、しまり、粘性強い)
3. 10YK3-3 (暗褐色、やや多くのローム状、少量の15cm以下のロームブロック含む、しまりやや弱い、粘性強い)
4. 10YK3-3 (暗褐色、多くのローム状、2cm以下のロームブロック含む、しまりやや弱い、粘性強い)
5. 10YK4-1 (褐色、多くのローム状、0.5-1.0cmのロームブロック含む、しまりやや強い、粘性強い)

SK01土層説明

1. 10YK3-2 (灰褐色、少量の1.5-2cm先のロームブロック含む、しまり強い、粘性やや弱い)
2. 10YK4-1 (褐色、やや多くの腐植土、多くのローム状、1-5cmのロームブロック含む、しまりやや強い、粘性やや弱い)
3. 10YK5-6 (灰褐色、少量のローム状含む、しまり、粘性やや弱い)
4. 10YK3-4 (褐色、多くのローム状、1.5cm以下のロームブロック含む、しまり、粘性強い)



第4図 SK01・SD01実測図



d. SK01 (東より見る)



e. SK01 (南より見る)



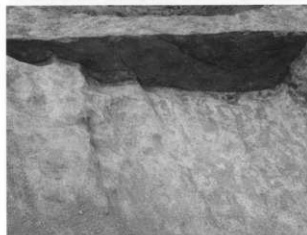
f. SK01土層断面



g. SD01



h. SD01土層断面 (1)



i. SD01土層断面 (2)



j. 調査完了時 (東より見る)



k. 調査完了時 (南より見る)

V. まとめ

川崎山遺跡は、これまで多くの調査が実施され（a～x 地点）、様相把握が進む遺跡のひとつであることは前記した。遺跡は旧石器～古代、中世～近代の時期の遺構、遺物が知られ、繰り返し時代を超えて占有された遺跡であることが判明している。知られる時期のなかで、本遺跡縄文時代の時期は、早期燃糸文の時期をはじめ早期の土器や前期、中期、後期などが知られており、特に遺構の検出状況が見られる前期頃には生活空間として本地が選択されたことは間違いないと考えられる。前記したように、今回本地点においても検出、調査した陥穴は、伴出遺物もなく、形態や各地点の状況等から勘案し、縄文時代に属する遺構であろうとしたものであるが、ただ時期の特定には至らなかった。本遺跡検出の陥穴はこれまでの例に本例を加え、10 地点 43 基が報告される（第 1 表）。その分布状態は、台地東及び南縁辺～中央部に検出例がみられ、特に台地東側の新川に向かう傾斜面部にかけては比較的密な分布があり、c、d 各地点に比較的纏まった検出例が見られる。また、前期後葉期の土坑や中期阿玉台期の住居などが m 地点で報告例があり、遺跡北側の谷津である池ノ谷津谷頭付近に展開することが報告される（9）。

前記したように、検出した陥穴は幾つかの異なった形態が知られる。多岐に亘る縄文期の時期が知られることから、これまでの見解においても特定の時期決定がなされず、縄文期として一括りの見解が示されているようである。しかし現状で 43 基を数える陥穴の存在は、極言すれば単一の時期の所産と考えるよりはむしろ一定期間の占有時期があったと考える方が妥当のようにも思われる。今回の y 地点においては 1 基のみの検出に過ぎなかったのは、陥穴の分布域が新川沿いに求められる傾向からすれば、疎の分布域内にあったからとも言え、その展開状態は興味深い。川崎山遺跡と同じ生活空間を有すると考えられる縄文期の周辺遺跡の様相に加え、本例を含めた遺跡の領域を考える貴重な例と言える。同様に陥穴の検出例としては、24 基を検出している浅間内遺跡例が知られ、時間的にはほぼ中期阿玉台期との報告が知られる。陥穴の時期同定ができることは遺構の性格上好例と言えるものであろうが、本遺跡と新川沖積地を挟んで対置する類例は留意する必要があるあり、m 地点に報告例のある住居の存在も意識しておく必要があるものと考えられよう。

今回の調査に際しては、数多くの機関等からご助言、ご指導を頂いた。特に市教委文化財班、併せて現地近隣の方々には格別のご配慮を頂いた。文末ながら感謝の意を表する。

地点	遺構数	地点	遺構数	地点	遺構数	地点	遺構数
b 地点	1	e 地点	1	m 地点	1	y 地点	1
c 地点	13	g 地点	4	n 地点	1	合計	43
d 地点	17	j 地点	3	q 地点	1		

第 1 表 各地点の陥穴

<参考文献>

1. 平岡 和夫・大賀 健 1979「萱田町川崎山遺跡発掘調査報告書」八千代市遺跡調査会・八千代市
2. 朝比奈 竹男 2002「萱田町川崎山遺跡b地点」千葉県八千代市不特定遺跡発掘調査報告1
八千代市教育委員会
3. 小川 和博ほか 1999「千葉県八千代市川崎山遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」八千代市川崎山遺跡調査会
4. 常松成人・川口貴明 2003「千葉県八千代市川崎山遺跡 d 地点」八千代市遺跡調査会
5. 秋山 利光 2008「千葉県八千代市川崎山遺跡 f 地点埋蔵文化財発掘調査報告書」八千代市教育委員会
6. 森 竜哉 2004「千葉県八千代市川崎山遺跡 h 地点—店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書」
八千代市遺跡調査会
7. 武藤健一・森竜哉・常松成人 2003「千葉県八千代市川崎山遺跡j地点—公共事業関連遺跡発掘調査報告書—」 八千代市教育委員会
8. 伊藤 弘一・宮澤 久史 2006「千葉県八千代市川崎山遺跡 k 地点—宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」八千代市遺跡調査会
9. 宮澤 久史 2008「千葉県八千代市川崎山遺跡m地点発掘調査報告書」八千代市教育委員会
10. 森 竜哉 2008「千葉県八千代市川崎山遺跡 n 地点発掘調査報告書」八千代市教育委員会
11. 八千代市教育委員会 2013「千葉県八千代市 市内遺跡発掘調査報告書 平成24年度」

報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよしかわさきやまいせき							
書名	千葉県八千代市川崎山遺跡							
副書名	y地点発掘調査報告書							
編者名	宮澤 久史・田川 良							
編集機関	有限会社原史文化研究所							
所在地	〒285-0835 千葉県佐倉市野田177 TEL.043-462-3084							
発行機関	株式会社中央住宅・八千代市教育委員会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2							
発行年月日	2023（令和5）年2月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川崎山遺跡 y地点	千葉県八千代市 豊田町 745 番 6	12221	241	35° 72' 16"	140° 10' 90"	2022.7.12 ～ 2022.7.22	31m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
川崎山遺跡 y地点	集落跡 包蔵地	縄文 近世以降	陥穴1基 溝1条	なし		新川の東、台地上に位置する。縄文時代の陥穴1基、近世以降の溝と考えられる遺構を検出した。		
要約	y地点では縄文期と考えられる陥穴1基、近世以降の溝1条を検出した。川崎山遺跡では台地縁辺に陥穴が複数地点で検出されており、往時の生活環境を知る貴重な資料と言える。							

千葉県八千代市

川崎山遺跡

—y地点発掘調査報告書—

発行日 2023（令和5）年2月28日
 編集 有限会社原史文化研究所
 千葉県 佐倉市 野田177
 発行 株式会社中央住宅・八千代市教育委員会
 千葉県八千代市大和田138-2
 印刷 株式会社ライフ
 千葉県成田市不動ヶ岡1128-15